

ワンポイント

人間の知性は衰退をはじめたか？(続篇)

- ① ここまで来た“AI で脳信号を文字・音声に”—AI の進化
- ② 「専門知軽視は人類の危機」 科学は揺らいているのか？専門知は必ずしも科学知ではない。シュンペーターが科学を再定義した「道具化された知識」は科学にあらず。専門知の適用は政治的立場に左右されうるが、科学は決して揺らがない。不安をあおる不可知論に要警戒。
- ③ 「第1条、なぜ国民ではなく天皇か？」 国民の総意というが問われたことは一度もない。国民主権とは相いれず、皇室は人権とは最も遠い存在。左翼陣営はもとより民主主義陣営は、継承問題に乗って云々ではなく、“天皇制”の是非を問うべき。
- ④ トランプ関税ショックの受け止め方。

『赤旗』記事「民主的経済秩序をめざす」「公正な貿易ルールが必要」において、「経済の民主的秩序」や「貿易の公正ルール」とは何か？経済における正義を言うならば経済の土台から考えなければならない。

【マルクスにおける「正義」とは。】(第3巻「利子」について、ギルバードが「公正な自然的利子」について語ったことへの反論)「諸取り引きの公正は、この取引が諸生産関係から自然的帰結として生じるということにもとづいている。…内容が生産関係に適応しているなら正当、矛盾するならば不当である。例として奴隷制は資本主義生産様式のもとでは不当。」

第3篇 社会的総資本の再生産と流通

第18章 緒論 第3篇のテーマ

第1篇循環論、第2篇回転は、個別資本の運動であった。第3篇では社会的総資本の運動をとり上げる。個別資本は社会的総資本の独立した一部分である。「個別諸資本の運動は互いにからみあい、互いに前提しあい、条件となり合っている。この絡み合いで社会的総資本の運動・循環をつくっている。」この循環は、【個人的消費・労働力の再生産】の商品流通を含む。価値の観点と素材の観点から考察する。素材観点から資本の相互依存関係を見ることができる。

第19章 対象についての従来の記述 再生産論の学術史

再生産論はその社会構成体が経済的危機に陥ったときに社会全体の解剖図として要求される。近代社会の入り口にケネーの経済表、出口(新しい社会の入り口)にマルクスの再生産表式がある。中間のスミスは、資本主義の階級的矛盾が目立たなかった時期で、批判よりは肯定が主であったため、解剖図は生まなかった。ドグマの再生産論があるのみ。

マルクスはケネーの経済表を読み解き、似せて「僕の経済表」をつくる(1863年)。スミ

スのドグマ克服に傾注し、理論を発展させて、2 部門の再生産表式に実らせた。

第1節 重農学派 ケネーの経済表

- ・前年度の収穫を出発点とする単純再生産の大略図。
- ・不変資本価値 c の確保。(スミスの後退:c の看過、前進:製造部門へ、適用の拡大。)
- ・農業のみを見ることで、自然の成長と経済の循環が重なり、見通しやすかった。
- ・初めての資本主義的生産(借地農場経営者が労働者を雇い入れ、資本主義的農業経営。)
- ・商工は農村家内工業、手工業が中心。

◎流動資本(年前貸し)・固定資本(原前貸し)が確保されている。

◎生産手段・消費手段が確保されている。

◎三階級の生存条件が示されている。

ケネーの経済表

→は、金の流れ

生産的階級	→税・地代	地主・王侯主権者	不生産階級
年前貸し (20億) 10億		税収入 (20億)	前貸(注:原典に記述—宮川) (10億) 10億
* 10億			10億
* 10億			
<u>食料10億・年前貸し10億(種もみ・肥料)</u>			
<u>20億</u> ここは絶対課税できない。 再生産ができなくなる。			

合計 50億

合計 20億

・主権者(10億・食料購入)→生産階級(10億・固定資本摩滅分・農機具購入)→不生産階級(10億・食料購入)→* 生産階級(10億)

・主権者(10億・家具購入)→不生産階級 (10億・原材料購入)→* 生産階級(10億)

◎主権者が課税できるのは、*20億のみ。

結果

ルイ王政の財政破綻立て直し財源がはっきりわかる。同時に、生産階級の生産発展のためには、生産階級に重い課税をする王侯貴族と、生産・商業活動の自由を制限する封建体制がじゃまであることがはっきりする。→ケネーの経済表のわずか20年後にフランス革命
重農学派は、中世から近代へ、歴史の大転換に導いた経済学です。重農学派経済学者は、革命政府の要職にもなった。ケネーはルイ王朝の宮廷侍医。財政再建のために社会の解剖図をつくるが皮肉な結末に。「経済学の看板は、その売り手をもだます」とマルクスは評す。